

広島オーストリア協会

会報 No.27

平成16年4月30日発行
編集・発行/広島オーストリア協会
〒730-8552 広島市中区白島北町19番2号
広島ホームテレビ 秘書室
TEL (082) 221-4964
FAX (082) 221-4731



▲ ミラベル庭園 (サウンドオブミュージックの舞台)

会員の皆様には、広島オーストリア協会の活動にご協力とご支援を賜り、誠にありがとうございます。

昨年度の活動を振り返りますと、当協会では、6月に総会、8月にはピアホルの会を、そして11月にはクラシックコンサートを開催しました。

ピアホルの会では、ウィーンにパレエ留学中の金田優香さんにウィーンでの暮らしについてお話をいただき、オーストリアの雰囲気を楽しむことができました。また、コンサートではベートーヴェン直系のピアニストであるルドルフ・ブッフビンダー氏を迎えての名作ソナタの数々に魅了されました。さらに、12月のクリスマス例会では、フルートとピアノによるクリスマスメドレーやゲームなど例年通り楽しい一夕を過ごすことができました。

また、オーストリア特別番組「オーストリアに魅せられて～素晴らしき夢追い人たち～」(広島ホームテレビ制作)が12月27日放映され、好評を博しました。

ところで、平成14年度の総会に出席されたハンス・ディートマール・シュヴァイスグート駐日オーストリア大使が、8月に駐中国大使として北京に転出され、その後任としてペーター・モーザー駐日大使が着任されました。出来るだけ早い時期に広島にお招きしたいと考えております。

協会では、オーストリアと音楽や文化面などを通してこれまで以上に交流を深めていくほか、経済、通商などの活動にも徐々に力を入れてゆきたいと存じます。

広島オーストリア協会では、今年も皆様のご期待に添うよう活動の充実に努めてまいります。会員の皆様の積極的な行事へのご参加をお願い申し上げます。



広島オーストリア協会 会長
在広島オーストリア名誉領事

橋本宗利

総会報告



去る6月5日(木)、広島全日空ホテルにおいて第15回総会が開催され、約120名の会員の方にご参加いただきました。

開会にあたり橋本会長からご挨拶があった後、事務局から平成14年度事業報告と決算報告が行われました。続いて平成15年度事業計画と予算案について、また役員の変更および選任について協議し、それぞれ満場一致で承認されました。

その後の懇親会では、始めに駐日オーストリア大使館文化担当参事官のクリスティアン・ハーゼンビヒラー様が挨拶され、橋本会長から記念品が贈呈されました。

そして、平成音楽大学助教授上田愛彦様がオーボエを、河越香織様がピアノを演奏され、会場の皆様は美しい音色に魅了されました。

協会名誉会長の篠原康次郎様が乾杯の音頭をとられて歓談に移り、ご出席の皆様は食事を取りながら和やかなひとときを過ごされました。

また、広島大学外国人教師で哲学博士のベルンハルト・エーリンガー様に、広島での体験談、オーストリアとの違い等についてお話をいただき、締めくくりには協会副会長である株式会社マルニの山中光会長のご発声で一同乾杯し、終宴となりました。



▲ オーボエ: 上田愛彦さん・ピアノ: 河越香織さん

平成15年度事業報告

平成15年度理事会・総会・懇親会

6月5日(木) 広島全日空ホテル
(参加者:123名)

第10回ピア・ホールの会

8月28日(木) リーガロイヤルホテル広島
(参加者:113名)

ルドルフ・ブッフビンダー ピアノリサイタル

11月7日(金) 広島国際会議場フェニックスホール
(参加者:1,035名)

クリスマス例会

12月3日(水) 広島全日空ホテル
(参加者:152名)

試写会・懇親会

3月24日(水) 広島ホームテレビ多目的ホール
(参加者:100名)

平成16年度活動予定

6月2日(水) 理事会、第16回通常総会、懇親会
8月 ピアホールの会

11月18日(木) ウィーン・モーツァルト・
オーケストラクラシックコンサート

クリスマス例会

12月 講演会

2月~3月 会報発行

年1回

役員の変更および選任について(平成15年6月5日現在)

役名	現任者	候補者	現職
会長	橋本宗利	橋本宗利	(株)広島ホームテレビ社長
副会長	松原恒夫	江川恵司	マツダ(株)執行役員 総務部長
〃	光井安子	光井安子	エリザベト音楽大学非常勤講師
〃	山中光	山中光	(株)マルニ会長
専務理事	松原一彦	松原一彦	(株)広島ホームテレビ総務局長
理事	岡田俊郎	世良幹夫	NHK広島放送局副局長
〃	金井宏一郎	金井宏一郎	(株)中国放送社長
〃	熊平雅人	熊平雅人	(株)熊平製作所社長
〃	クリスティアン・ハーゼンビヒラー	クリスティアン・ハーゼンビヒラー	駐日オーストリア大使館文化担当参事官
〃	黒川浩明	斎藤忠臣	(財)広島平和文化センター理事長
〃	島田戴平	島田戴平	(財)ひろしま国際センター専務理事
〃	近岡宏	近岡宏	(株)テレビ新広島専務取締役
〃	難波照雄	難波照雄	広島エフエム放送(株)常務取締役
〃	福嶋正純	福嶋正純	広島大学名誉教授
〃	藤川魏也	藤川魏也	広島テレビ放送(株)社長
〃	古川吉彦	古川吉彦	(株)広島ホームテレビ副社長
〃	松本卓臣	松本卓臣	福山商工会議所会頭
〃		望月成二	エビス電工(株)社長
〃	森本弘道	森本弘道	(株)広島総合銀行社長
〃	山本一隆	山本一隆	(株)中国新聞社副社長
監事	川野篤彦	志水省夫	(株)新日放社長
〃	山下隆	山下隆	中国電力(株)常務取締役

活動報告

ルドルフ・ブッフビンダー ピアノ・リサイタル



広島オーストリア協会主催「ルドルフ・ブッフビンダー ピアノ・リサイタル」が、2003年11月7日(金)午後6時45分から広島市中区の広島国際会議場フェニックスホールで行われました。

ベートーヴェン直系(血縁関係ではなく、師弟関係)の世界的ピアニストであるブッフビンダー。

彼は5歳の時に最も若い学生としてウィーン音楽大学への入学を認められ、11歳で著名なピアノ教育家ブルーノ・ザイドルホーファーのマスター・クラス入門を許可されました。ザイドルホーファーは、グルダの師として名高いわけですが、この名伯楽は伝説的なレシェティツキーの孫弟子にあたり、さらにさかのぼればツェルニー、ベートーヴェンにまでたどり着く一大系譜が出来上がるのです。

当日の演奏曲目は、第8番「悲愴」、第14番「月光」、第6番/第23番「熱情」で、深奥をきわめる3大ソナタに1,000人余りの聴衆は酔いしました。

ピアホールの会

8月28日(木)、ピアホールの会をリーガロイヤルホテルで開催しました。今年で10回目を迎えたこの会には、今年も110人あまりの方が参加しました。会ではアンサンブル・ラティーンによる「ウィーン我が町」の演奏に始まり、オーストリアビールで乾杯いたしました。会ではウィーンにバレエ留学中の金田優香さん

今、ウィーンで最もコンサートの多いピアニストといわれているだけに活力がみなぎっていました。

さて、当日会場で回収したアンケートからお客様の生の声をご紹介します。

「力強い演奏だった。迫力があった」、「とても優しい音色が心に染みだ。満月を眺め月光を聴いて、まさに秋の夜長にロマンチックなひとときを過ごすことができた」、「奇をてらわないとても素直な演奏に好感が持てた。特にピアノシモの弾き方は絶妙です」、「3大ピアノソナタが一度に聴ける機会に恵まれて幸せ。胸が熱くなる感動的な時間を過ごした」、「ピアノの様々な表情を与えてもらった。特に激しき...人間の湧き出ずる力に感動した」、「本当に引き込まれる演奏。月光では涙ぐみ、感動のうち、放心状態で帰路についた」、「まさに神業である」、「特に熱情の第3楽章では、血の気が引き、泣きそうなくらい感動した」、「まるでウィーンにいるかのような気分になった」etc...

また、このコンサートを担当したホームテレビ事業部員(女性)は、「世界的なピアニストなので私も緊張していたのですが、楽屋でお会いすると、気さくで優しい方だったのでホッとしました」。

今回、東京、埼玉、福岡、徳島など全国7カ所を巡ったツアーの締めくくりが、広島。

ブッフビンダーさんは、夫人同伴で日本各地のよさを満喫し、広島オーストリア協会の皆様もベートーヴェンの世界を堪能されました。



にウィーンの暮らしについて話をしていた後、ビンゴゲームで会場は盛り上がりました。

この会は「気軽に飲んで食べて会員同士の親睦を図る」のが目的で、皆さんの顔もほんのり赤く染まりながら楽しい時間はあっという間に過ぎていきました。

「オーストリアに魅せられて」

オーストリアを紹介する55分番組「オーストリアに魅せられて～素晴らしき夢追い人たち～」を制作する機会に恵まれ、昨年の年末、無事放送することが出来ました。制作にあたり、オーストリア大使館を始めオーストリア航空、関係機関の皆さんに大変お世話になりありがとうございます。あらためてお礼申し上げます。

ウィーン空港に降り立った翌日、ウィーン市内ではこの時期珍しいといういきなり的大雪に見舞われ、寒さにぶるぶる震えながらロケをスタートしたのが昨年の10月。その後は比較的穏やかな天気にも恵まれ、ウィーン、インスブルグ、ザルツブルグと約2週間、オーストリアの魅力をたっぷり吸収して帰国して早いものでもう数ヶ月がたちました。しかしそれ以来、私の楽しみが一つ増えました。それは家に帰って、本場で買って来たばかりの「リーデルのワイングラス」でワインを飲むことです。スーパーで買って来た安物のワインでもなぜか、このグラスで飲むと味がぐっとおいしくなるのです。五つ星ホテルの「フォーシーズンズ椿山荘 東京」には、リーデルのワイングラスでワインをサービスしてくれる特別の部屋もあります。そこでは、一ヶ月に一度お得意さまを集めてワインパーティーを開くそうですが、リーデルと他のワイングラスで飲み比べると「同じワインでもこんなに味が違うのかとみんなびっくりされる」と総支配人が話してくれました。私が、インスブルグの本社に隣接されたショップで購入したワイングラスは、それほど高価なものではありませんが、唇があたるところはとても繊細な薄さで、それ故、洗う際にとっても気をつかうらしく、妻には不評です。ともあれ、このように少しはオーストリア通になれたのも今回の番組のおかげです。



ログナーバードホテルのスパ

特に今回は、オーストリア大使館という強い味方があったことで

ずいぶん助かりました。我々スタッフが六本木にある大使館で打ち合わせをしたのが、昨年の9月上旬。本来なら、旅行書を読みあさったり、オーストリアに詳しい人物を捜すなりバタバタとするところですが、そこは本場の生のアドバイスを受けるわけですから、的確な情報を得ることが出来ました。先ほど紹介した「リーデル」をはじめ、アクセサリーとして女性に大人気の「スワロフスキー」、オリンピック選手を次々に生み出している「シュタムススキー学校」から、人気のホイリゲ（居酒屋）、又、日本人にはほとんど知られていないウィーン郊外にある穴場の温泉など貴重な情報を知ることが出来たのです。

情報を集めた後は、番組の構成です。ドラマにたとえば、番組のストーリーをつくるという所でしょうか。そのために番組の柱となる人を見つけることが必要になります。オーストリアの冬は早いので、10月にはロケに出発しなければならず、気持ちは焦り気味。とにかく広島出身のオーストリアでがんばっている人はいないかと、急いでオーストリアに関係ありそうなところから探すことにしました。広島市現代美術館に、エリザベト音楽大、広島アンデルセン、それから広島県庁の企業担当など、片端から電話しました。そこから見つけたのが、福山出身でウィーン天満屋レストランのマネージャーをしている山川浩治さんでした。山川さんは、我々がロケに伺う半年前にウィーンに赴任したばかりで、さらに新婚ほやほや。結婚生活のスタートが、いきなりウィーンという人物に遭遇できたのも、なにか運命的なものを感じ直感でこの人に決めました。

もう一人は、昨年夏のオーストリア協会のビアパーティーで、たまたま帰国していて、ラッキーにも会うことの出来た18才の金田優香さん。彼女は、高校在学中にバレエ留学することを決意して、単身ウィーンに渡り、現在なれないドイツ語の世界で一人がんばっているとのこと。これで、登場人物が決まりました。この二人を中心にオーストリアで取材をしていく内に、今回の番組のタイトル「オーストリアに魅せられて～素晴らしき夢追い人たち～」が生まれたわけです。

今回の番組で、もう一人欠かせない人物がいます。番組の案内役となっていた、ウィーン在住の日本人オペラ歌手「ジョン・健・ヌッツォ」さんです。一昨年の紅白歌合戦に出場した彼は、一躍日本でも有名になり、現在NHKの大河ドラマ「新撰組」のテーマソングを歌う歌手として大抜擢され、今後の活躍が更に期待される人物です。ヌッツォさんにウィーンの魅力をとずねますと、すぐにどんよりと曇った冬のウィーン特有の空を指さしました。「この薄暗さが好いのですよ、時の流れがゆったりとしていて自分を見つめ直すことが出来る、最高の自分を見つけだすことが出来る場所なのです。古来からあらゆるジャンルの芸術家が、アイデアを出せる場所なのです。」モーツァルト、ベートーヴェン、ヨハンシュトラウスなどが実際に居た場所ですから、思わず納得してしまいました。

中世の町並みそのまま残された美しい町、まるで映画のセットか、テーマパークの中を自分が歩いているような、そんな気持ちにしてくれる町ウィーン。そのウィーンの町中では、なぜか若者より高齢者の方が目に付きました。オーストリアの老後の生活保障は、日本と比べものにならないぐらい良いそうなので、生き生きとくらしている高齢者を見てそう感じたのかもしれませんが…。年輩者にとっては町の空気というか、落ち着いた雰囲気心地よく、都会といえども暮らしやすい所だなと感じました。私自身年輩者に属する？の

女は、高校在学中にバレエ留学することを決意して、単身ウィーンに渡り、現在なれないドイツ語の世界で一人がんばっているとのこと。これで、登場人物が決まりました。この二人を中心にオーストリアで取材をしていく内に、今回の番組のタイトル「オーストリアに魅せられて～素晴らしき夢追い人たち～」が生まれたわけです。

今回の番組で、もう一人欠かせない人物がいます。番組の案内役となっていた、ウィーン在住の日本人オペラ歌手「ジョン・健・ヌッツォ」さんです。一昨年の紅白歌合戦に出場した彼は、一躍日本でも有名になり、現在NHKの大河ドラマ「新撰組」のテーマソングを歌う歌手として大抜擢され、今後の活躍が更に期待される人物です。ヌッツォさんにウィーンの魅力をとずねますと、すぐにどんよりと曇った冬のウィーン特有の空を指さしました。「この薄暗さが好いのですよ、時の流れがゆったりとしていて自分を見つめ直すことが出来る、最高の自分を見つけだすことが出来る場所なのです。古来からあらゆるジャンルの芸術家が、アイデアを出せる場所なのです。」モーツァルト、ベートーヴェン、ヨハンシュトラウスなどが実際に居た場所ですから、思わず納得してしまいました。

ジョン・健・ヌッツォさん

中世の町並みそのまま残された美しい町、まるで映画のセットか、テーマパークの中を自分が歩いているような、そんな気持ちにしてくれる町ウィーン。そのウィーンの町中では、なぜか若者より高齢者の方が目に付きました。オーストリアの老後の生活保障は、日本と比べものにならないぐらい良いそうなので、生き生きとくらしている高齢者を見てそう感じたのかもしれませんが…。年輩者にとっては町の空気というか、落ち着いた雰囲気心地よく、都会といえども暮らしやすい所だなと感じました。私自身年輩者に属する？の

で、この印象は間違いのないでしょう。とはいえ若者の姿が印象に残らなかったのは少し気になりました。もう一つ目に付いたことで、驚いたことがあります。土日になりますとオーストリアでは、飲食店をのぞいて全てのお店が閉まってしまうのです。人が集まる有名な観光地にある店といえども同じなのです。一番儲かる日に不思議でならず、通訳の人に質問すると答えはこうでした。「土日はみんなが休み日、お店に勤めている人のお子さまだって休日は、お父さんお母さんと一緒に過ごしたいでしょ。」うーん確かにそうですが、日本の常識から考えるとあり得ない… と思いながらも、こちらの方が人間らしい生き方といえそうです。

最後に、映画「サウンドオブミュージック」に魅せられた世代のみなさま、ウィーンから少し足をのばして、是非ザルツブルグへ行くことをおすすめ致します。町そのものが、世界文化遺産に指定された素晴らしい町です。映画の舞台となったトラップ家の御殿を始め、ドレミの歌が唄われたミラベル庭園など映画のロケ地を訪ねていくことが出来るのです。現地ではサウンドオブミュージックの撮影現場となった場所を巡る観光バスも走っており、特にアメリカ人に人気があるよう

で実際にたくさんツアーバスとすれ違いました。インスブルグで見た素晴らしい景観、残念ながら訪れることが出来なかったチロル高原に、世界一美しいと言われる街ハルシュタット。今回、詳しくふれることが出来なかったハプスブルグ家を始め、これにまつわるたくさんの美術品など、まだまだ紹介し切れていない魅力がオーストリアにはあります。チャンスがあれば、是非第二弾の制作をと、意欲がみなぎる今日この頃です。

最後に、映画「サウンドオブミュージック」に魅せられた世代のみなさま、ウィーンから少し足をのばして、是非ザルツブルグへ行くことをおすすめ致します。町そのものが、世界文化遺産に指定された素晴らしい町です。映画の舞台となったトラップ家の御殿を始め、ドレミの歌が唄われたミラベル庭園など映画のロケ地を訪ねていくことが出来るのです。現地ではサウンドオブミュージックの撮影現場となった場所を巡る観光バスも走っており、特にアメリカ人に人気があるよう



スタッフ (ザルツブルグ)

で実際にたくさんツアーバスとすれ違いました。インスブルグで見た素晴らしい景観、残念ながら訪れることが出来なかったチロル高原に、世界一美しいと言われる街ハルシュタット。今回、詳しくふれることが出来なかったハプスブルグ家を始め、これにまつわるたくさんの美術品など、まだまだ紹介し切れていない魅力がオーストリアにはあります。チャンスがあれば、是非第二弾の制作をと、意欲がみなぎる今日この頃です。

広島ホームテレビ 制作部長 野崎 賢治

私とオーストリア



オーストリア航空
客室乗務員
対馬伸子

今回、広島ホームテレビ様が制作されました「オーストリアに魅せられて」の番組のお手伝いをさせていただきました対馬と申します。

私はオーストリア航空の客室乗務員として、月に平均3本オーストリア・ウィーンと日本（成田または関西）間の乗務を致しております。私共は主基地（ベース）がウィーンなので、フライトの合間が日本での滞在となります。各々友人に会ったり、実家に滞在したり、つかの間の母国「日本」を満喫しております。ヨーロッパの航空会社は比較的勤務がゆったりしているので、フライトが終れば次の勤務まで最低3日以上は休みとなります。ウィーンに来て3年が経ちますが、来た当初は右も左もわからず、とにかく生活に慣れることで精一杯でしたが、本来どこにいても快適熟睡（とっても重要！）できる私は割合早いうちに順応できたので、午前中はGYM、午後はドイツ語学校！と頑張る時があれば、同期やオーストリア人の友達とウィーンの穴場発掘に勤しんだり、はたまた近郊ヨーロッパ小旅行や日帰りでイタリアのセール（買いすぎ防止の為）に行ったりと、ここぞとばかりEuropean life（?!）を楽しんでお

ります。

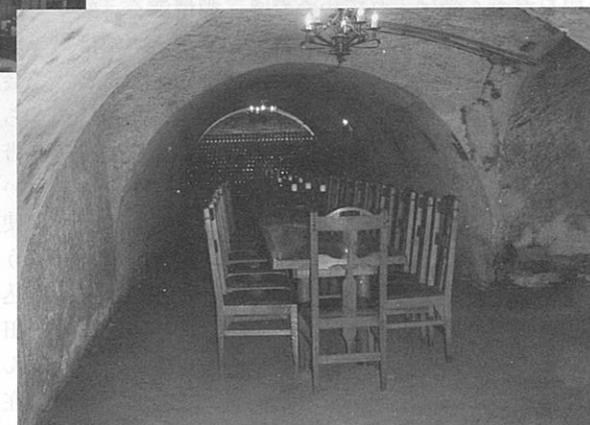
さて、そんなオーストリアの印象を一言で表現しますと、“意外にも知られていないオーストリア・ウィーン”とでも言いましょうか。悲しいですが、どうもそのような気がします。というのも、私自身ウィーンに来る前までは「音楽の都・ウィーン」というイメージしか持ち合わせておらず、別段クラシック通でもない私にはフランスやイタリアに比べるとどうも刺激がなさそう…というのが正直な気持ちでした。しかし、あなどるなかれ、オーストリアは番組の中でも紹介したようにおいしいワインの産地であり、それを仲間とワイワイ飲める気軽な居酒屋もあれば、点在する穴場のSelect Shopでお買い物をしたり、ちょっと気取って「オペラでも見る？」なんていう事が日常的に楽しめるおしゃれな町なのです！そう考えるとヨーロッパ広しと言えども、クラシカルなムードを今に残し、かつ芸術に観光にShoppingにと3拍子揃っている都市は“意外にウィーンなのかも！”と。そう朗々と自慢をすると友人が「でも、観光で行くのと実際住むのではちがうでしょ？ウィーンってどうよ」と。



◀ スワロフスキー



ワイン蔵 ▶



ウィーンに住んで早3年、今ではこののんびりと暮らす生活に慣れ居心地良く感じますが、来た当初は日本と全く違う生活パターン・スピード感覚に当惑せざる得ませんでした。まず、一番困ったのはお店が土曜はPM5時、日曜・祝日はCLOSE当たり前、もちろん24H営業なんてありえません。やる気の無い国だ！と憤慨したものです。特にフライトが土曜帰りの時は「しまった、日曜の食料どうしよう…」と幾度となく思いました。が、3年過ぎてみると、「これが本来あるべき生活のパターンなのかも」と。月曜～金曜まではしっかり働いて（買い物は計

画的に！）、土曜・日曜は家族・友人とゆっくり過ごす。「不便?! 全然!! 便利になり過ぎて、それに慣れすぎる事の方がよっぽど怖い。」とオーストリア人。なるほど。あえて急速な変化を求めず、昔ながらのものを大切に、守り、自分たちのペースでゆっくり生活していく。だからこそオーストリアの独特の文化が損なわれず、今に息づいているのだと思います。日本ではちょっと忘れかけていた大切なものを気づかせてくれたこの国に、今は愛着を感じていますし、今回そのオーストリアを紹介する番組に参加出来ることを、大変光栄に思っております。

金田優香さん母 金田美砂

「オーストリアに魅せられて」。何て素敵な響きでしょう。

今回、この素晴らしい番組に夢追い人の一人として娘を加えていただきました事を、本当にありがたく光栄に思っております。

振り返れば13年前の運命のあの日、5歳で藤田真弓バレエ教室に入所した時から、娘はずっとバレエに魅せられっ放しです。藤田先生にはヤンチャな娘を温かく受け入れていただき、愛情深く、厳しく導いていただきました。幼いころから、娘はただただ踊ることが好きな子で、藤田先生のこと心から尊敬し信頼していました。時には先生に叱られた日など（ヤンチャなもので）迎えに行くと車に乗るなり、「もう、ウカ（ユウカ）バレエやめるんじゃ。」とつぶやくので「そっか、わかった。」と私が応えますと、数時間後には「ウカね、やっぱりバレエやめん。ウカ、バレエ好きじゃもん。」と撤回しに来るのです。幼い頃、何回かこういうことがあり、その度に私は心の中で笑ってしまいました。

「好き」。その心の炎がこんなにも長い間灯り続け、ますます大きな炎となって、ついに16歳の時、「海外に出て踊りたい。」という一大決心を娘にさせたのです。「自分の好きなこと」をみつけた人間がどんなに幸せなものかをそばでずっと見てきた私たち夫婦は、娘が決めた進路に心から賛同しました。親として、先が見えない事や、若くして周囲の人と違う道を選択する事に不安がないわけではありませんが、娘の影響なのか、いつの間にか私たちもヤンチャになったらしく、不安よりも心の奥から湧いてくる勇気のほうが勝つようになったのです。

そして、ついに2002年6月、チャンス到来。藤田先生を通じて先生の大先輩でベルギー在住の振付家、坂井朝彦先生に「ウィーン市立コンセルヴァトワール」を紹介していただけることになり、あわただしく娘と私はウィーンへ渡りました。ウィーンの街はとても美しく歩くだけで心が癒され、娘もすっかり気に入ったようでした。学校や生徒さ

んの雰囲気も温かく、そこにいることに違和感を感じませんでした。オーディションの始まる前に校長先生が「言葉がわからない分、頭、目、耳、魂、すべてを総動員させて頑張ってください。」と仰ってくださいました。そのお陰で娘も気合いが入り、火事場の馬鹿力を出し切って念願の合格通知を手にし帰国することができました。

帰国してから8月の出発までの日々は、今思い出しても目まぐるしく大変ではありましたが、ここでも素晴らしい出会いが私たちを待っていてくれたのです。

7月に入りようやく入学手続きの書類がドイツ語で12枚送られてきたので、まず、それを翻訳会社に訳してもらい、書類の空欄を埋めていくうち、「オーストリア在住の身元引受人が必要」と書いてあるのを見つけて、一瞬途方に暮れてしまいました。すぐに気を取り直し、オーストリア大使館に連絡して広島に「オーストリア協会」という施設があると聞いて、菓をもすがる思いで駆け込んだのです。その時のスタッフの方々、そして田中様の親切な対応は今も忘れることができません。数日後、田中様より連絡がありオーストリア在住のIPP常子様という方が私たちの事情を汲み取ってくださり、快く身元引受人になってくださるとの報告が入りました。この世には尊いお心をもった方がいらっしゃるのだと、本当にありがたく、感謝、感動いたしました。IPP様には娘がウィーンに着いてからの様々な手続きに付き添っていただいたり、異国で生きていく心構えを伝授していただいたり、そして今もずっと心の支えになっていただいております。

2002年夏、本当に沢山のありがたいご縁に助けをいただいて16歳の冒険旅行は始まったのです。今、2年目に入り、18歳になった娘は夢に向かう旅の途上で、ありとあらゆる経験を重ね、喜怒哀楽すべてを存分に味わいながら、わが道を邁進しております。時には弱気になり、「もう、ダメだ。」と思うこともあるでしょうが、すべては自分の栄養と受け止め、感謝を忘れず、自由自在の発想と勇気を持って自分の人生を切り開いていってほしいと願っています。

「第9」

年末といえば「第9」ですが先日「天声人語」（朝日新聞）に次のような記事が載っていましたので抜粋しご紹介いたします。

※ベートーベンの交響曲第9番の日本初演は1918年6月だったとされる。捕虜として徳島県の収容所に入れられていたドイツ兵が演奏した。第一次世界大戦の末期、ドイツが敗色濃厚なころである。収容所は比較的自由な雰囲気でも文化活動も盛んだった。それにしても楽器をそろえるだけでも大変だったろう。手製の楽器もあったろうし、ファゴットをオルガンで代用させるなどの工夫もしたらしい。初演は45人のオーケストラに90人の合唱団という堂々たる編成だったという。…中略。ヨーロッパでい

ま第9は、憲法論議に巻き込まれている。EU憲法草案に、第4楽章の「歓喜の歌」が統合のシンボルとして採用されているからだ。当初賛成する独仏に対し、英国、北欧などが渋ったという。結局、草案には盛りこまれることになった。しかし憲法自体は論議が難航し、成立のめどが立っていない。年末にかけて日本各地で演奏される第9は歴史の波にもまれながら、様々な人々に感動を与えてきた。「苦悩から歓喜へ」劇的な展開をするこの曲は、時代や国境を越えてなお引き継がれていくだろう。



活動報告

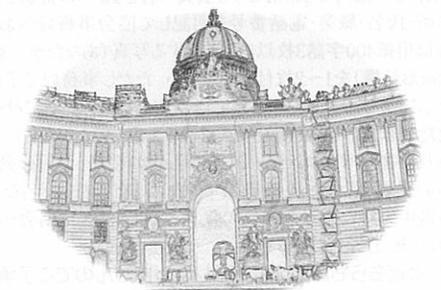
春の試写会

去年の講演会に続き2回目となる試写会・懇親会には、100名の会員の方が来られました。周りで桜が咲き始めた広島ホームテレビ多目的ホールでは、広島オーストリア協会の橋本会長の挨拶の後、昨年12月27日に広島ホームテレビで放映された「オーストリアに魅せられて～素晴らしき夢追い人たち」が上映されました。

そして試写会の後、この番組の制作に携わった野崎賢治プロデューサーが、オペラ座の撮影秘話（舞台を撮影するのに莫大な金額がかかること、いろんな権利が発生するため大変なこと。注ぐと違いがわかるリーデルワイングラスの素晴らしさなど。さらに取材対象者選定の苦労話としてバレリーナを目指す金田さんはオーストリア協会イベントで直接交渉したことや天満屋

の山川さんは、赴任直後でしかも新婚なのでドラマ性があると思ったこと。）などを披露しました。

このあと、懇親会ではオーストリアビールがふるまわれアットホームな料理とともにオーストリアの風情をちょっぴり味わいました。



特報! 今秋のクラシックコンサート決定!

W i e n e r M o z a r t

ウィーン・モーツァルト・オーケストラ

O r c h e s t r a

2004年11月18日(木)

午後6時45分開演(午後6時15分開場)

広島厚生年金会館



広島オーストリア協会主催、恒例クラシックコンサート

2001年「ライナー・キュッヒル ヴァイオリンコンサート」

2002年「天使の歌声～ウィーン少年合唱団」

2003年「ルドルフ・ブッフビンダー ピアノ・リサイタル」

…そして、2004年はさらにスケールアップ!

広島オーストリア協会がこの秋、
情熱と自信をもってお届けします。

- ◆ 前回 2002 年日本公演プログラムから (抜粋)
歌劇「フィガロの結婚」K. 492 より 序曲/フィガロのアリア「もう飛ぶまいぞ、この蝶々」
歌劇「ドン・ジョヴァンニ」K. 527 より ツェルリーナとドン・ジョヴァンニのデュエット「手をとって」
歌劇「魔笛」K. 620 より パパゲーノとパパゲーナのデュエット「パ、パ、パ、パパゲーナ」
交響曲 第 35 番 二長調 K. 385 「ハフナー」より第 4 楽章

18 世紀の宮廷楽士達の衣装で演奏。歌手も交えて盛り上がる、オール・モーツァルト・ガラ・コンサート! その名も「ウィーン・モーツァルト・オーケストラ」。ウィーン・フィル、ウィーン・フォルクスオーパーのメンバーで構成される 33 名の極上オーケストラです。彼らの目的は「ウィーン伝統や文化的遺産を守る」こと。その音楽的評価は高く、本国オーストリアでも絶大な人気を誇っています。

指揮者も含め全員 18 世紀頃のコスチュームで演奏し、譜面台など小道具にもこだわる徹底ぶり! また、モーツァルトの有名な歌劇「アリア」をソプラノとバリトンの二人の歌手が歌い上げ、聴衆を絶対に飽きさせない組み立てとなっています。

投稿をお待ちしています

- ① オーストリアの旅の思い出・生活・習慣・芸術のこと・オーストリアの友人の話・その他何でも結構です。会員の皆さまからの寄稿を募集します。住所・氏名・職業・電話番号を明記して協会事務局へお送り下さい。原稿用紙400字詰3枚以内、関連する写真(あなたが一緒に写っていただければなお結構)を1~2枚付けて下さい。ただし事務局で手直しさせていただきます。(ご投稿の写真は後日お返しいたします)
 - ② 会員が主催するコンサートなど催し物の情報、会員の動向・消息・会報への提言・協会への希望も、できれば①と同様、氏名などご記入のうえお送り下さい。なお会報への提言(400字程度)・協会への希望は住所のみ、無記名でも結構です。
- ①、②どちらも原稿の返却はいたしませんのでご了承下さい。

米国产牛肉の輸入禁止で、日本のチキン店から牛丼が姿を消す中、ウィーンでは日本のものと一味違う牛丼が人気を集めています。この牛丼の味の秘密は、タレに加えるウィーン産白ワイン。これで地元産牛肉を長時間煮込むことで食感がまるやかになり、薄切り肉を食べ慣れないオーストリア人の口にも合うようになったそうです。いよいよ旅行シーズン到来、オーストリアへご予定のある方は、話のタネに是非味わってみてはいかが?

編集後記